

# 別府・湯布院における持続可能な環境と観光に関する考察

鈴木 孝 弘

朝 日 幸 代<sup>1)</sup>

## 目次

- 1 はじめに
- 2 現地でのヒアリング調査結果
- 3 別府のまちづくりの取り組み
- 4 おわりに

## 1 はじめに

近年、訪日外国人観光客（インバウンド）が急増しており、停滞する既存産業に代わる経済成長の原動力として観光産業に期待する政府は、2020年に「外国人観光客」4,000万人とする目標を掲げていた。1989年に年間284万人だった訪日外国人旅行者数は、2019年に韓国からの訪日旅行控え等あったが3,188万人となり、この30年間で海外を訪れる日本人の数（アウトバウンド）を大きく上回るようになった（観光庁 [2020]）。この背景には、世界的な観光ブーム拡大があり、2000年には6.8億人に過ぎなかった世界の国際観光客数は2019年には14.6億人に達した（UNWTO（国連世界観光機関）による）。国際観光客数と世界の実質GDPには強い相関がみられ（観光庁 [2020]）、新興国の経済成長、LCC（Low Cost Carrier）や予約サイト Airbnb などの発展に伴う個人旅行の簡易化、中国や東南アジア諸国などを対象にした査証の免除や発給条件の緩和、クルーズ船の増加などがインバウンド急増につながってきた。

このような世界的な観光のあり方は、観光客の急激な増加に伴う様々な悪影響が指摘されるようになった。特に「オーバーツーリズム」と呼ばれる都市キャパシティを越える観光客の急増が多く地域で問題となった（佐滝 [2019]、中井 [2019]、村山 [2019]、朝日 [2020]）。これには観光客が一時期に特定の地域に集中することによる公共交通や道路の混雑・交通渋滞による排気ガスの

---

1) 三重大学人文学部

増加、ごみの増加などによる自然環境・生態系への悪影響などに起因とする地域資源の質・観光資源の劣化や、騒音などの生活環境の悪化等の環境負荷の増大などがある（アレックス・清野 [2019]、山路 [2019]）。また、観光事業者の開発行為等が、不動産高騰、観光資源や生活環境に影響が出る場合もある。このため、環境負荷を増大させることなく、持続的に観光客を受け入れることができるような、環境と観光を両立させた観光客の受入手法に関する検討が必要である。観光客のインバウンド政策を推進する観光庁は、「持続可能な観光推進本部」を2018年に設置した。一方、国土交通省は同年、観光は経済だけでなく、地域社会や環境に影響を及ぼすことにも着目し、環境政策等其他分野の施策とも連携しながら、経済、地域社会及び環境といった総合的な視点で取り組んでいく必要があるとした（国土交通省国土交通政策研究所 [2018]）。

しかし、オリンピックイヤーとなるはずであった2020 年を迎えると、新型コロナウイルス COVID-19感染症が世界的なパンデミックを引き起こし、今まで堅調に増加していた訪日外国人旅行者数は急減した。このような突然のコロナ禍の状況下、相次ぐイベントの自粛・中止などの中で、観光業はきわめて厳しい状況にあり、世界的にオーバーツーリズムの問題は沈静化している。しかし、それは一時的なものであると予想され、世界人口が増大しつつあり、世界経済が回復して途上国の経済成長が続いていけば、将来的に、オーバーツーリズムが再び進行することになり、貴重な観光資源を失ってしまう可能性も生じる。例えば、世界遺産や観光地は本来ならば人類にとってかけがえのない遺産であり後世に受け継がなければならないものである（中村 [2019]）。わが国では未だオーバーツーリズムの認知度が低い、政府が目指す持続可能な観光を実現させるためには我々一人一人がオーバーツーリズムなどの負の問題を理解し、政府の地元住民と観光客の双方を考慮した対策が求められる（阿部ほか [2020]）。地域に外部から人々が集中して訪れる観光拠点都市においては、インバウンド対応を中心とした観光振興ばかりでなく、危機管理を含めた総合的な政策の中で観光が考えられるべきことが指摘されている（安福・天野 [2020]）。

ところで、観光地と呼ばれる場所の特性は異なり、観光庁は「都市型」、「歴史文化型」、「リゾート型」、「温泉型」、「自然型」のタイプに分類している（観光庁 持続可能な観光推進本部 [2019]）。前報（鈴木・朝日 [2020]）では、大分県の代表的な温泉地である湯布院（大分県由布市湯布院町）の現地視察・ヒアリング調査を実施し、オーバーツーリズム問題への対応を調査した。さらに、湯布院の観光地特性を他の九州の10か所の温泉地（別府、波佐見、嬉野、武雄、指宿、霧島、人吉、雲仙、阿蘇内牧、原鶴）と比較・検討するため、多変量解析の手法の一つである主成分分析法を適用して考察を加えた。この分析では、観光地特性には、2018年の総観光客数、日帰り観光客数、外国人宿泊客数、観光消費額、地域人口、人口密度、温泉以外の観光資源である自然・文化・歴史的豊かさ、福岡からのアクセスの8種を採用した。その結果、湯布院の観光地特性は、インバウンドに関する指標と温泉地の伝統や規模に関する指標の両面において阿蘇内牧温泉に最も類似している

ことが明らかになった。また、インバウンドに関する指標面で別府温泉との類似性が認められた。

そこで、本稿では、温泉地の源泉総数と湧出湯量で第1位であり、「国際観光温泉文化都市」に指定されている別府を取り上げて現地調査等を行い、湧出湯量で第2位の湯布院と比較検討しながら、環境と観光を両立させる持続可能な観光地のあり方に関する取組みの現状と課題を考察した。

## 2 現地でのヒアリング調査結果

### 2.1 新型コロナウイルス感染症のインバウンドへの影響

訪日外国人に日本文化や訪日旅行をアピールするため、2003年にビジット・ジャパン・キャンペーンが開始されて以降、リーマンショックや東日本大震災の影響があったものの訪日外国人旅行者数は増加した。その訪日外国人旅行者の旅行目的別の内訳について、2000年から2020年までの推移を図1に示す。2019年のアジアからの訪日外国人旅行者数は、2,637万人で前年と同数、そして訪日外国人旅行者数全体に占める割合は82.7%となった。中国政府は2020年1月27日から国内に加え海外への団体旅行等を禁止し、その後、多くの国々における入国制限等により、2011年以降に急増した訪日外国人旅行者は、2020年に入るとコロナ禍の影響で急減することになった。

2000年以降、新型コロナウイルス（COVID-19）のような感染症の要因により観光に影響を与えたものには以下の3つがある（青木 [2020]）。2002年11月に中国広東省での感染報告から始まったSARS（重症急性呼吸器症候群：Severe Acute Respiratory Syndrome）は、2003年北半球のインド以東のアジアとカナダを含む32の国々の地域で感染が拡大した。日本では図2のように2003年のアウトバウンドを含む出国者数は前年比20%減となり、観光業に大きな影響を与えた。その一方で、日本国内の感染はみられない（厚生労働省 [2021]）ことから訪日外国者旅行者数は前年比1%減となった。SARSは、このようにアジアを中心に観光を含む様々な産業に影響を与えた（Chou, J., Kuo, N. F., & Peng, S. L. [2004], Hanna, D., & Huang, Y. [2004], Lee, J. W., & McKibbin, W. J. [2004], Siu, A., & Wong, Y. R. [2004]、青木 [2020]）。

次に2009年4月にメキシコやアメリカで最初に感染が確認された豚由来の新型インフルエンザ（H1N1）である。WHOは、2009年6月に新型インフルエンザの感染警戒水準を「フェーズ6」に引き上げ、パンデミックが始まった状態であると宣言した。3つめは2012年9月にWHOから報告されたMERS（中東呼吸器症候群：Middle East Respiratory Syndrome）コロナウイルス（MERS-CoV）である。MERSの流行による経済的影響は、サウジアラビアが2014年から2016年まで、そして韓国では2015年において特に大きく影響した（青木 [2020]）。MARSや新型インフルエンザ（H1N1）の日本への影響についても日本人の出国者数にはやや影響があったものの訪日外国者旅行者数は増加している。

新型コロナウイルス（COVID-19）の日本への影響は、2020年2月訪日外国人旅行者数の前年同

月比の減少から明らかになり、この２月は前年比約 41.7 %になった。そして、３月には約 7 %、４月には99.9%減の2,917人、2020年１～12月の合計では、約411.6万人と前年の87.1%減となった。その国別では、日本全体では中国からの訪問割合が30.1%と最も高く、次いで韓国からの17.5%、台湾15.3%であった。その後も現在まで改善の目途は立たない観光需要の状況が続き、2021年１月には、首都圏で再び、２度目の緊急事態宣言が出された。新型コロナウイルス感染拡大を受けた世界各国での出入国規制が響き、訪日客は1998年（410万6,057人）以来22年ぶりの低水準になり、政府が掲げた20年の訪日客目標4,000万人の１割程度にとどまった。

一方、国土交通省の調査によると（国土交通省 [2019]）、九州内の移動では、大分県を目的地とするインバウンドは福岡県に次いで多く、移動する出発地と目的地の組み合わせでは、福岡県⇄大分県のルートが最も多くなっている。実際、ラグビーワールドカップ2019（2019年９月20日～10月22日）において、期間中に福岡市を訪れた外国人のうち、九州各県へ移動した人の割合では、大分県が最も高く約13.9%であった（福岡市経済観光文化局、[2020]）。福岡市への外国人入国者数は2019年に269.5万人であり、これは日本全体の約8.5%であり、内訳は福岡空港214.2万人、博多湾9.0万人、クルーズ船46.3万人であった。国別では、福岡市では韓国42.2%、台湾11.9%、中国8.3%の順であり、日本全体と異なり中国の割合が低くなっている。

このようなコロナ禍の状況下、政府は2020年４月にGo To トラベルキャンペーンを発表し、コロナ禍で大きな打撃を受けた景気・経済を再興するための方策を実施している。このキャンペーンは、①Go To トラベルキャンペーン（旅費を半額援助する事業）、②Go To イートキャンペーン（飲食店の食事代を援助する事業。10月スタート）、③Go To イベントキャンペーン（エンターテインメント鑑賞料金を援助する事業）、④Go To 商店街キャンペーン（商店街でのイベント、プロモーション、観光商品開発など、商店街を活性化させる事業）から成っている。この事業の成果は、まだ発表されていないが、次に述べるように別府・湯布院地域では10月以降に国内観光客の増加につながったとされる。

## 2.2 ヒアリング調査結果

「持続可能な環境と観光」の把握に必要な対象現象の最新事情に関する適切なデータ収集と正確な現状把握のために、別府と昨年度調査を実施した湯布院について現地調査と関係機関へのヒアリングや情報収集を行った。なお、2011年時点における別府市の市、観光団体および市民が一体となった観光振興の取り組みに関するヒアリング調査報告（石橋・狩野・野方 [2011]）がある。

2020年11月27日（金）、別府市役所内の別府市観光協会においてオーバーツーリズムの観光動態についてヒアリング調査を行い、その後、別府市内の現地調査を行った。11月28日（土）に湯布院（由布院とも表記されるが、観光客が集中する温泉地域は旧湯布院町にあり、町村合併後は湯布院

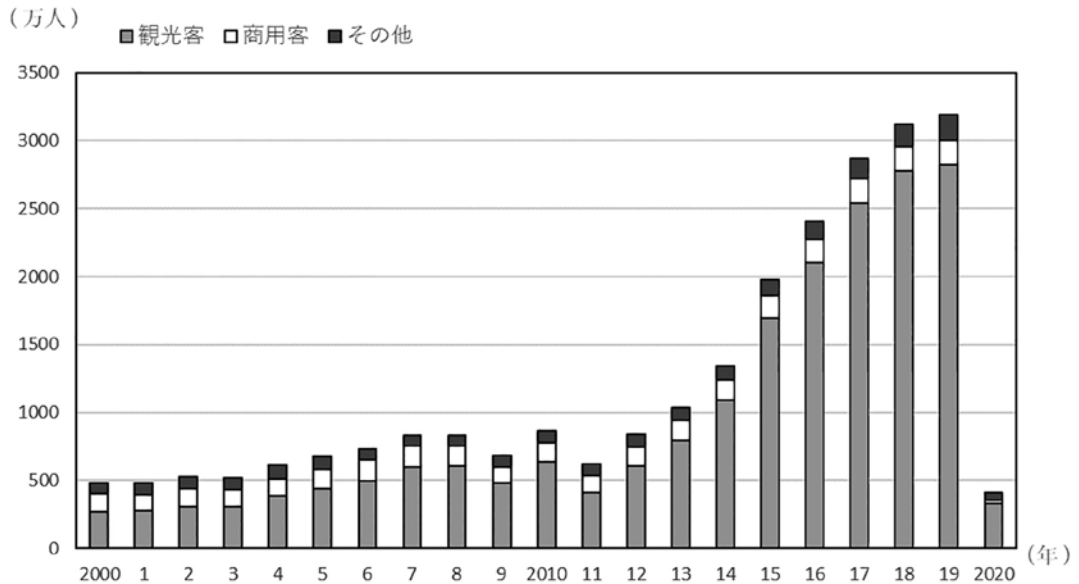


図1 訪日外国人旅行者数の内訳の推移

出典) 日本政府観光局 (JNTO) 資料に基づき著者作成

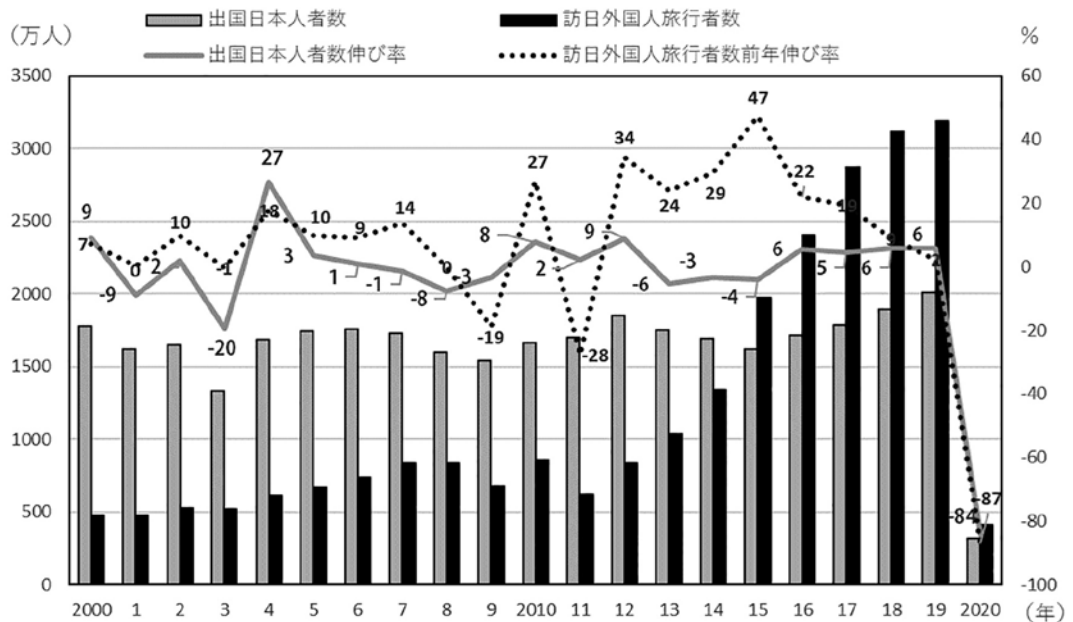


図2 訪日外国人旅行者数、出国日本人者数、各伸び率の推移

出典) 日本政府観光局 (JNTO) 資料に基づき著者作成

と表記されることが多いため、本論文ではこの標記を使用する)において、現地調査と由布市まちづくり観光局でのヒアリング調査を実施した。ここは昨年度に引き続きヒアリング調査のため(鈴木・朝日 [2020])、特にこの1年間のCOVID-19が観光客の動向にどのような影響を与えているかについて詳しく調査した。なお、調査時は、ちょうど日本全体のコロナ感染者数がやや低下し、Go To トラベルキャンペーン中であったため、両地域における国内旅行者は前年の状況にかなり戻っていた。

#### (1) 別府でのヒアリング調査

別府は古くから日本を代表する温泉地であり、市内各所に「別府八湯」と呼ばれる温泉が湧出しており、温泉の他、海と山が貴重な観光資源となっている。年間を通して多くの国内観光客が別府を訪れているが、2011年4月には、観光庁から「訪日外国人旅行者の受け入れ態勢整備に係る外客受入地方拠点」に選定されている。

別府市における日帰り宿泊を合わせた観光客は、1970年代にピークを迎えたが、近年では800～900万人の水準で推移している(図3)。2019年は、日韓関係の悪化で韓国からの韓国客が減ったが、ワールドカップ大分大会により欧米からの観光客が増え、2018年より微減であった。

2019年の発地別宿泊客の割合は、福岡県が最も多く22.4%、大分県が10.4%、その他九州が14.3%と九州が47.1%を占めている。その他の地域では、中四国が11.3%、関東が10.0%で他の地域は少ない。

別府市を訪れる外国人旅行者は、2019年のデータでは全旅行者の約7.4%の約62.1万人であり、このうちアジアからが約89%と圧倒的に多い。国・地域別では、韓国が39.4%を占め最も多く、次いで台湾(構成比16.0%)、中国(同13.3%)、香港(同11.6%)、タイ(同3.0%)となっており、韓国からの観光客が多いのが特徴である(別府市観光戦略部観光課 [2020])。韓国人観光客がひじょうに多い理由は、地理的に近く、LCCや大型クルーズ客船を利用して先ず福岡に入国し、九州各地を旅行して別府に温泉入浴に立ち寄る観光客が多いことによる(鈴木 [2013])。国際観光都市の京都市と比べてみると、2019年の京都市の観光客数は5,352万人であり、外国人旅行者は16.6%の886万人であった(京都市産業観光局 [2020])。そのうち外国人宿泊者数(延べ人数)は89万であり、中国人が29.6%を占めている。京都市との違いは、京都市はインバウンドにおける中国人の割合が全国平均に近いが、別府ではインバウンドが京都市の半分以下であり、その依存度が低い点にある。さらに、別府は中国人の割合が低いが、中国人旅行者の来日ルートは、一般には東京や大阪が中心で、団体ツアーではゴールデンルートと言われる名古屋―富士山―箱根―東京というコースが一般的で、その逆の成田空港・羽田空港からの入国ルートが多いことによると考えられる(鈴木 [2013])。

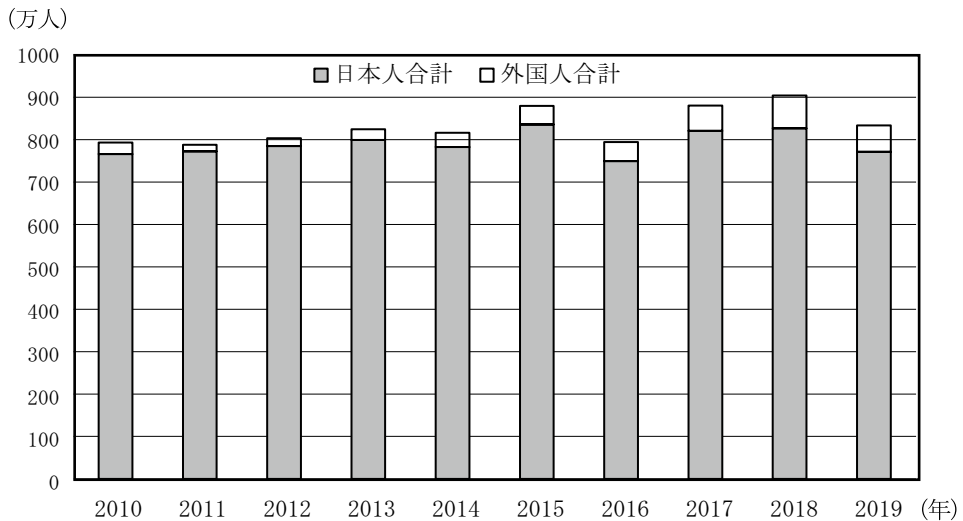


図3 別府市観光客数の推移

出典) 別府市観光動態要覧 (2010-2019年) より著者作成

表1に別府市観光協会における観光の現状についてのヒアリング調査結果の内容を要約したものを示す。別府市は、湯布院と同様にインバウンドへの依存度が少ないため、2020年に入ってコロナ禍の影響も京都市などに比べると少なく、年後半にはほぼ前年並みに近づいている状況であった。別府市は現在のところ、オーバーツーリズムはほとんど発生していないと判断できた。

表1 別府市におけるヒアリング調査 (2020年11月27日) のおもな内容

- ・観光面のインバウンドは、2015～2019年まで毎年、約10万人ずつ増加した。
- ・別府への外国人観光客は、LCCで福岡・北九州から別府・湯布院に訪れるケースが多い。
- ・日本人観光客は、団体旅行から家族旅行が増え、2～5月頃までレンタカーの利用が増えたが、その後、ほとんど観光客が訪れなくなった。
- ・2月頃から、韓国や中国からのインバウンドはほとんど0になった。
- ・GoToトラベルキャンペーンの影響によって、10月頃から国内観光客は戻りつつある。
- ・修学旅行客数は1965年にピークで約142万人だったが年々減少し、2019年は約4万2千人（総観光客数の0.5%）まで低下して、その回復を試みている。
- ・観光客に対する「おもてなし」を重視した施策を行っている。例えば「別府学」や「別府八湯ウォーク」がある（詳細は表3参照）。

## (2) 湯布院でのヒアリング調査

別府と湯布院は、観光快速バスまたは路線バスでいずれも1時間弱の距離にあり、その途中に観光スポットがあるため、観光客は別府駅あるいは大分空港からバスで湯布院に移動するケースが多い。湯布院は、由布岳（標高1,584m）の麓に広がる自然環境が豊かで落ち着いた内陸部に位置する盆地の農村地域であり、人気温泉地になったのは最近のことである。もともと、大正時代に別府市の「亀の井」旅館が別荘地として湯布院を開発したため、両者の関係は深く、湯布院温泉は、以前は奥別府と呼ばれた鄙びた温泉地であった。

しかし、緑と温泉以外に目立った観光資源がない湯布院は、1990年以降、観光を「まちづくり」と融合させる「観光まちづくり」の先進地として、平成以降の長期的な不況の中で活性化を模索する地方経済からも大きな注目を集めている（波佐見焼振興会 [2018]、大澤・米田 [2019]、後藤 [2019]）。2019年10月には、由布市内の塚原温泉・庄内温泉・挾間温泉を含めた「湯布院温泉郷」として拡充指定された

由布市の観光客数は2007年のピーク時の472万人から、図4に示すように2010年以降は400万人弱で推移し、2016年～17年にはピーク時の20～25%ほど減少したが、2018年には442万人と回復した。一方、外国人比率は2010年には3%ほどであったが、2017年から増加し2018年には20%、2019年には15%になった。このころには、一部地域では、宿泊施設数の増加による競争激化や観光客による混雑やマナーなどが課題となっていた。2020年の観光客数は未だ発表されていないが、新

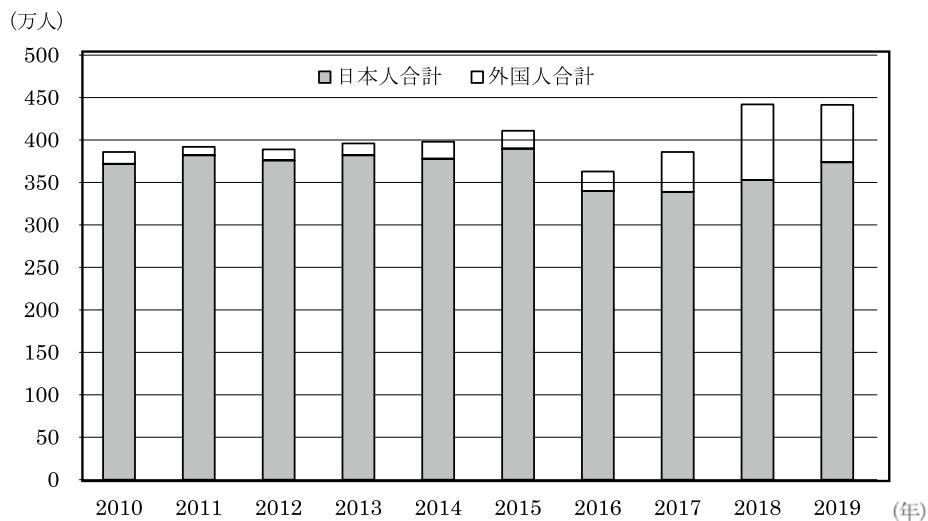


図4. 由布市観光客数の推移

出典) 由布市観光動態調査 (2010-2020年) より著者作成



型コロナウイルスの影響を受けて観光客が減少し、宿泊業や飲食業などの事業者に影響が拡大していると考えられる。

湯布院では、生活と観光のバランスを測る指標の一つとして、人口と観光客数との関係に注目した施策を行ってきている。湯布院町の人口は1万人の町（定住人口）であり、年間約400万人の観光客数（交流人口）は、1日当たりの観光客数／定住人口の値がほぼ1になる。しかし、2018～2019年はその比率が1.2ぐらいに増加し、一部の地域や時期によっては観光客の増加によるオーバーツーリズムや社会経済環境の変化に直面し、まちづくりの課題を模索している。

前報のヒアリング（鈴木・朝日 [2020]）では、おもにオーバーツーリズムに対する湯布院の取り組みを調査した。今回は2020年に入ってからCOVID-19の影響について、おもにヒアリング調査を実施した結果、表2のような情報が得られた。

表2 湯布院における2020年11月までのCOVID-19の影響  
(2020年11月28日ヒアリング調査)

- 
- ・温泉街は新型コロナウイルスの感染拡大による影響で2月から宿泊客が減り始め、緊急事態宣言が出された後の4月と5月は大幅に旅行者が減少した。
  - ・2020年は、新型コロナウイルスの影響を受けて、由布市でも宿泊業や飲食業などの事業者に影響が拡大している。
  - ・2020年9月末頃から国内旅行者の数および動態はほぼ例年通りに戻った。
  - ・Go To トラベルキャンペーンは、7月の開始から9月までは観光客数に影響はほとんど見られなかったが、10月以降に集客に効果があった。
  - ・2020年7月の豪雨被害によって由布院駅を通過する鉄道が現時点で不通になっているが、バスや自家用車の観光客が多いため、影響はあまりない。
  - ・オーバーツーリズムについては、大分県や近隣の県からの旅行者は増加しており、10月以降、週末には交通渋滞などが生じるようになった。
  - ・年齢層の高い団体旅行者が増え始め、元の状態に戻りつつある。
  - ・飲食店や土産物店は、GoToトラベル「地域共通クーポン」があまり使われず、経営が厳しいところが多い。
  - ・九州では、沖縄や福岡が観光客やビジネス客の大幅な減少がみられるが、大分県は九州地区ではCOVID-19影響が最も少ないとみられる。
  - ・福岡からの高速バスは、利用者減によって減便している。
-

### 3 別府のまちづくりの取り組み

別府市の産業別就業人口（国勢調査）〔別府市、2021〕によると、観光関連産業への就業者は2005年には46.2%であったが、2015年には33.1%と低下傾向にある。しかし、観光業を主産業とする別府の地域経済構造は維持されている。

別府温泉街では、観光ニーズの変化に対応できず衰退してきた。そこで、市民・民間企業中心にまちの地域資源を見直す活動が始まり、地域の人々と観光客とが一緒にまち歩きを楽しむことなどを通じて、持続可能な観光を目指した種々の取り組みを行ってきているが、最近のおもなものを表3に示す。

近年は、旅行形態が団体から個人へと変化し、団体客を主な対象としたマスツーリズムから近隣県民や地域住民を主な対象とした、環境に配慮した伝統文化体験や生活文化体験などを組み入れた体験型のニューツーリズムと呼ばれる新しい観光が定着しつつある。別府市のマスツーリズムとニューツーリズムの協働について、活動の特徴と関係団体との関係を堀ら〔2016〕が分析している。それによると、別府市のマスツーリズムでは、マーケティングと観光客の受け入れが中心であり、ニューツーリズムでは、ブランディングと地域づくりを中心に活動が行われ、活動の違いを明らかにしている。しかし、インバウンド観光に関連したマスツーリズムの活動では両者に接点が見られるとしている。

マスツーリズムのおもな取り組みには、表3にあげたように国際クルーズ船誘致、大分県の文化の向上、地域経済の活性化を図るため、国内外の学会や各種大会などのコンベンションを誘致するMICE、ニューツーリズムの最近の取り組みには、2001年～2014年10月まで別府八湯地域において、交流体験型イベントを開催する「別府八湯温泉博覧会（オンパク）」が実施されてきた。現在、それに代わるものとして「別府八湯ウォーク」が行われている。

「別府八湯ウォーク」は、地元住民のボランティアガイドが地元住民ならではの推奨スポットをゆっくり歩きながら案内するウォーキングツアーとして好評を博しており、観光客、市民、ボランティアの交流の場ともなっている。この取り組みの特徴は、従来、観光協会主体だったイベントを地区ごとに地元の人が主催するようにした点にある。初期の目的は観光客向けではなく、団塊の世代の人々が出稼ぎ等に出ていて町の歴史や文化をよく知らなかったため、地元の人のために地元の人が案内するというものであった。このような観点は、「別府学」の構築にもつながっている。

現在は観光客中心になっている「別府八湯ウォーク」には、定期的に行われている次のような19コースがある。

竹瓦かいわい路地裏散歩、別府駅前ぶらり散歩、観海寺歴史ロマン街道ウォーク、山の手レトロ散歩、浜脇温泉・セピア色散歩、鉄輪温泉ゆけむり散歩、-----

表3 別府市の持続可能な観光を目指した最近のおもな取り組み

---

・「別府学」

「別府学」は、生涯学習の一つとして幼稚園児から小中学校の総合学習や道徳の時間に行われているものである。市内の小中学生が、別府市の歴史、温泉、観光、伝統文化や油屋熊八などの先人の功績等を学び、別府に対する誇りと愛着及び自らまちづくりを担う心を育むことが目的である。市では、学習資料を作成し、市内の全小中学生らに配布している。

・「別府八湯ウォーク」

プロではない、地元ガイドが別府八湯（別府・鉄輪・浜脇・観海寺・明礬・堀田・柴石・亀川）を歩きながら観光客に案内する活動である。

・観光客向けのイベント

毎年、10回ほど開催されている。2019年には、別府八湯温泉まつり（参加者・観客数：約13万人）、べっぴん火の海まつり（約22.9万人）、べっぴんクリスマスファンタジア（約14.3万人）など12回のイベントが開催されている。

・国際クルーズ船誘致

2011年3月から、別府国際観光港第4埠頭がクルーズ船専用の港として供用開始された。

・MICE

大分県の文化の向上、地域経済の活性化を図るため、別府国際コンベンションセンタービーコンプラザを主会場として、国内外の学会や各種大会などのコンベンションを誘致するものである。

---

国際クルーズ船誘致は、インバウンド観光を目的として、2011年3月、別府国際観光港第4埠頭がクルーズ船専用として供用開始され始まった。14万トン級の客船も接岸でき、2011年8月に国際クルーズ船が初入港した。特区申請をした2012年から2020年における別府国際観光港への国際クルーズ船の寄港船舶数の推移を図5に示す。2020年は、年末に1隻だけの寄港にとどまったが、それ以前の2016～19年には年間に20隻ほどの寄港があった。

国際クルーズ船寄港は、寄港時間は日中の7時間から10時間程度に限られるが、千人以上の乗客が一度に上陸するため地域への経済効果も大きい。2012年に中国人観光客らを乗せて8回寄港した（乗船客数は延べ14,863人で、その内、中国人は14,172人）レジェンド・オブ・ザ・シーズ（6万9,130t）の寄港による経済効果は、直接効果で4億円（1回当たり5千万円）、経済波及効果で6億5千万円（1回当たり8千万円）と推計されている（別府市 [2014]）。寄港数が2011年以降伸び悩んだ原因は、九州内で港湾施設の規模が同等（12万トンクラス対応可能）で、寄港地としての観光資源も温泉などで類似している鹿児島港との競合があるためである。鹿児島港の方がCIQ（税関、出入国管理、検疫）体制の面で優れ、ファーストポートとして選ばれる傾向が強く、別府港はセカンドポートが多いとされている。

(隻数)

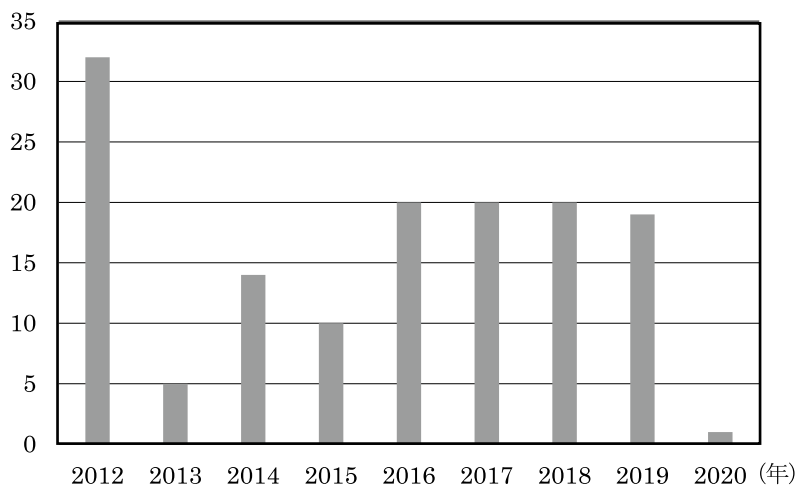


図5 別府国際観光港への国際クルーズ船の寄港船舶数

出典) 別府市観光課 <https://www.city.beppu.oita.jp/sangyou/kankou/detail9.html>  
より著者作成 (2012年のデータは別府市 [2014] による)

一方、クルーズ船観光の問題点として、乗客・乗務員のし尿を含む膨大な量の生活排水、生ごみ、不燃ごみ等の廃棄物が、船内処理以外に海洋投棄されたり、船内の発電による大気汚染や船体を安定させるために海水を取り入れたり、排出するバラスト水の問題などが危惧されている（池田 [2020]）

観光客の増加による様々な問題や地元の人々の暮らしとの調和を図るためには、湯布院で重視されている指標、1日当たりの観光客数／定住人口の値を別府市の2019年のデータでみると、0.20である。これより、別府ではオーバーツーリズムが生じる可能性は局所的な混雑を除いてはきわめて少ないことが分かる。経済の高度成長期に収容人員が1万人以上の広域観光地として著名であった温泉地として、別府、熱海、伊東、箱根、白浜が挙げられている（山村 [1998]）。そこで、別府・湯布院とこれらの温泉地の定住人口と1日当たりの観光客数値を比較したものを表4に示す。別府はこの中では、その指標の値が最も低く、熱海、伊東、白浜は湯布院の値の1/5～1/2程度である。箱根は4.41と突出して高いが、首都圏に近く日帰りの観光客の割合が2019年では全観光客約1,896万人の約77%の1,466万と多く、宿泊客数でみると、定住人口と宿泊客数がほぼ湯布院と同程度であり、1日当たりの宿泊客数／定住人口の値は約1.0になる。箱根町では、観光客が多い上に箱根湯本、大涌谷、芦ノ湖など特定の場所に同じ時間帯に集中するため、慢性的な交通渋滞などの問題が生じている。

表4 別府・湯布院と他の温泉地との1日当たりの観光客数／定住人口の比較(2019年)

温泉地	別府	湯布院	熱海	伊東	箱根	白浜
1日当たりの観光客数／定住人口	0.20	1.20	0.54*	0.27	4.41	0.45
日帰り客数／総観光客数	0.71	0.77	0.57*	0.58	0.77	0.42

\*2018年のデータによる

出典) 別府市観光戦略部観光課 [2020]、由布市観光統計情報 [2020]、熱海市観光建設部観光経済課 [2020]；伊東市 [2020]、箱根町 [2020]、和歌山県 [2020]

## 4 おわりに

環境負荷を増大させることなく、持続的に観光客を受け入れることができる環境と観光を両立させる方策に関する検討を目的として、日本の代表的な温泉観光都市である別府・湯布院について、まちづくりの現状および課題を考察した。

観光は世界的な感染症、経済活動の低迷、世界的な財政・金融不安などによって大きな影響を受ける不安定な側面がある。2020年に入ってから新型コロナ禍の影響で両地域ともに観光客数が激減していた。しかし、両地域はインバウンドへの依存度が少なかったため、2020年に入ってからコロナ禍の影響も京都市などに比べると軽微であり、GoToトラベルの効果もあってヒアリング調査時の11月半にはほぼ前年並みに戻っていた。別府・湯布院地域は、COVID-19終息後の社会経済的環境を考えると、オーバーツーリズムのリスクは比較的小さい。しかし、本調査においてみたように、観光客の増加によって観光資源や生活環境に影響が及ぶメカニズムと、受入容量に関わる地域の特性を的確に捉え、活力の好循環を意識しながら持続可能な観光客の受入に取り組んでいくことが重要である。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP19H04380の助成を受けたものです。2020年11月27～28日の現地調査にご協力をいただいた(一社)別府市観光協会専務理事 安波照夫様、(一社)由布市まちづくり観光局・事務局次長 生野 敬嗣様には心より感謝を申し上げます。

## 参考文献

- 青木虎徹 [2020]、「パンデミックの経済的影響と経済対策 —SARS等の経験から—」国立国会図書館 調査と情報 —ISSUE BRIEF— 第1107号 (2020. 7.16)、1-7。
- 朝日幸代 [2020]、「第6章 訪日観光による混雑の影響に関する分析」、『グローバル化と地域経済の計量モデリング』、山田光男・増田淳矢編著、175-206、中京大学経済研究所研究業書27輯、中京大学経済研究所。
- 熱海市観光建設部観光経済課 [2020]；令和元年版 熱海市の観光。
- 阿部大輔、石本東生、江口久美、岡村 祐、西川 亮、沼田壮人、後藤健太郎 [2020]、『ポスト・オーバーツー

- リズム：界隈を再生する観光戦略』、学芸出版社。
- アレックス・カー・清野由美 [2019]、『観光亡国論』、中央公論新社。
- 池田 豊 [2020]、「外需、外国依存のクルーズ船観光の危険性」、住民と自治、685号、22-24、
- 石橋太郎、狩野美和子、野方 宏 [2011]、「別府市観光ヒアリング調査報告」、静岡大学経済研究、16(1)、17-30。
- 伊東市 [2020]、伊東温泉観光観光統計。
- 大澤健・米田誠司 [2019]、『由布院モデル：地域特性を活かしたイノベーションによる観光戦略』、学芸出版社。
- 観光庁 [2019]、観光白書（令和元年版）。
- 観光庁 [2020]、観光白書（令和2年版）。
- 観光庁 持続可能な観光推進本部 [2019]、「持続可能な観光先進国に向けて」。
- 京都市産業観光局 [2020]、令和元年（2019年）京都観光総合調査。
- 厚生労働省 [2021]、「健康＞感染症情報＞SARS＞重症急性呼吸器症候群（SARS）関連情報 SARSの発生状況について」、<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou05/03.html>、2021年5月4日アクセス。
- 国土交通省国土交通政策研究所 [2018]、「持続可能な観光政策のあり方に関する調査研究」（概要）。
- 国土交通省 [2019]、「FF-Data（訪日外国人流動データ）」、[http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/soukou/sogoseisaku\\_soukou\\_fr\\_000022.html](http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/soukou/sogoseisaku_soukou_fr_000022.html)、2021年1月10日アクセス。
- 国土交通省総合政策局環境政策課 [2019]、「環境と観光の両立のための持続可能な観光客受入手法に関する調査業務報告書」。
- 後藤健太郎 [2019]、「生活と観光のバランスを考える視点と環境変化への対応 —2000年代以降の「生活型観光地」湯布院の取り組みを通じて—」、観光文化、第240号、20-24。
- 佐滝剛弘 [2019]、『観光公害—インバウンド4000万人時代の副作用』、祥伝社。
- Siu, A., & Wong, Y. R. [2004]. Economic impact of SARS: the case of Hong Kong. *Asian Economic Papers*, 3(1), 62-83.
- 鈴木 晶 [2013]、「別府における国際観光に関する考察」、別府大学短期大学部紀要、第32号、75-83。
- 鈴木孝弘、朝日幸代 [2020]、「湯布院のオーバーツーリズムに対する持続可能なまちづくりに関する考察」、経済論集、46巻、1号、1-14。
- Chou, J., Kuo, N. F., & Peng, S. L. [2004]. Potential impacts of the SARS outbreak on Taiwan's economy. *Asian Economic Papers*, 3(1), 84-99.
- 中井治郎 [2019]、『パンクする京都：オーバーツーリズムと戦う観光都市』、講談社。
- 中村俊介 [2019]、『世界遺産—理想と現実のはざままで』、岩波書店。
- 箱根町 [2020]、令和元年入込観光客総評。
- 波佐見焼振興会編 [2018]、『波佐見は湯布院を超えるか』、長崎文献社。
- Hanna, D., & Huang, Y. [2004]. The impact of SARS on Asian economies. *Asian Economic Papers*, 3(1), 102-112.
- 福岡市経済観光文化局 [2020]、「福岡市の観光・MICE」2020年版（福岡市観光統計）。
- 別府市 [2014]、「レジェンド・オブ・ザ・シーズ」の別府国際観光港寄港に伴う経済波及効果調査報告書。
- 別府市観光戦略部観光課 [2020]、2019年別府市観光動態要覧。
- 別府市 [2021]、別府市の統計データ、[https://www.city.beppu.oita.jp/sisei/toukei\\_housei/tokei\\_index.html](https://www.city.beppu.oita.jp/sisei/toukei_housei/tokei_index.html)、2021年3月10日アクセス。
- 堀 桂子、佐藤由利子、村山武彦、錦澤滋雄 [2016]、「別府市の観光まちづくりに関する協働の課題 —マストゥーリズムとニューツーリズムの分析より—」、観光研究、28巻、1号、97-107。

村山祥栄 [2019]、『京都が観光で滅びる日：日本を襲うオーバーツーリズムの脅威』、ワニブックス.

安福恵美子、天野景太 [2020]、『都市・地域観光の新たな展開』、古今書院.

山路 彰 [2019]、『訪日観光における持続可能な推進についての一提言 ―SGG活動など生活者視点に着目して』、日本国際観光学会論文集、26号、183-192.

山村順次 [1998]、『新版日本の温泉地：その発達・現状とあり方』、社団法人日本温泉協会、pp.75-78.

由布市観光統計情報 [2020]、<http://www.city.yufu.oita.jp/kankou/toukei/>、2021年3月10日アクセス

和歌山県 [2020] 和歌山県の観光客動態.

Lee, J. W., & McKibbin, W. J. [2004] . '2 The impact of SARS', "*China: New Engine of World Growth*", 19-33, Garnaut, R., Song, L., (ed), <https://www.jstor.org/stable/j.ctt24h9qh.10>, ANU Press.